

「ニュースステーション」が伝えた「二風谷ダム」報道

—ニュース・ドキュメンタリーにおける映像テキストの分析を中心に—

日吉昭彦

1. はじめに

本稿は、平成16年1月8日に放映された「ニュースステーション（テレビ朝日）」における「ダムが洪水を呼ぶ？～北海道二風谷ダム～」と題されたドキュメンタリー形式の報道（以下、「二風谷ダム」報道）を対象に、主にメディアのメッセージ分析の方法を用いて、番組構成や編集、映像テキストの編成という観点から、番組が伝達したメッセージの傾向や、報道を通じて生産されたイメージ、意味などについて考察し、テレビ・ジャーナリズムの特性について検討するものである^①。

「二風谷ダム」報道は、平成15年8月の北海道における台風10号による出水および二風谷ダム下流の門別町富川北地区での浸水被害とその背景、国土交通省北海道開発局主催の地域住民への説明会、建設中の平取ダムの計画等を扱った報道ドキュメンタリーで、取材にもとづく調査報道である。浸水被害のあった半年後の平成16年1月に、テレビ朝日のニュース報道番組「ニュースステーション」の一部で放映された。

「ニュースステーション」は、分かりやすく時に辛辣なコメントを述べることなどで知られる久米宏キャスターを擁した、テレビ朝日のプライムタイムの報道番組（現「報道ステーション」）である。1985年に放映を開始して以来、「分かりやすさ」をコンセプトに、「ニュース・ショー」というジャンルの報道番組を一般に広めたことや、報道番組を外部の制作会社と共同制作したことなど、「ニュースステーション」をめぐるテレビ・ジャーナリズムに関する論評は、枚挙に遑がない。例えば、碓井は、ニュースステーションが、「町場のジャーナリズム」として、視聴者の目線に近いところから社会の動きを伝える番組であることや、ドキュメントの「手法」を使って、ドキュメント「抜き」で表現するような制作方法を用いていることなどを指摘している（碓井、1998）。

角間（角間、1977）によれば、日本における「ニュース・ショー」という放送形式は、テレビ朝日の前身NET（日本教育テレビ）が始めたもので、当時53%以上の教育番組放送を義務付けられていた民放のNETが、午前8時台から9時台という視聴率の取れない時間帯に、娯楽以外の番組で視聴率を得られる番組を企画したものが日本の民放の「ニュース・ショー」第一号になる「木島則夫モーニング・ショー（1964）」であった。現在では「ワイドショー」の始まりと考えられているが、昭和52年に発行された角間の著書では、「ニュース・ショー」として位置づけられている。

川崎は、報道の主軸の一つであったドキュメントが、ニュースのワイド化や情報番組の増加などで衰退するなかで、アメリカ式のローカル・テレビ・ニュースのショー・ビジネス化を化粧直しの

に取り入れた「ニュース・ショー」が登場したと述べている（川崎、1996）。ニュースのショー・ビジネス化とは、川崎によれば「多数の視聴者を引き付けるためにプレゼンテーションの手法を優先させ、内容よりは見てくれに重点を置いてニュースをショー化したもの（川崎、1996）」である。映像技術の発展とともに、現場でのビデオ取材や編集等が可能となり、「現場の映像を伝えればそれで報道したということになって」しまう、悪しき「ファクト」主義を根付かせ、映像化の困難な抽象的なデータ、政治的・経済的背景の分析は、テレビに馴染まないと隅に追いやられることになった、とも述べている（川崎、1996）。

「ニュース・ショー」は、ドキュメンタリーとワイドショー、ショー・ビジネス化した情報番組といったジャンルの中間的な位置づけにあり、商業主義的な要請と視聴者重視の発想のなかで、ドキュメントという報道形式を変容させてきた番組であることが分かる。

テレビニュースの形式の多様化とともに、テレビ・ジャーナリズムという言葉も一般化している。こうしたなかで、メディア研究者の藤竹暁は、「テレビには独自の文法があり、活字ジャーナリズムで問題となる『客観的な報道』は、映像を主体にすることで、新しく検討されなければならなくなっている（藤竹、1996）」と述べている。「ニュースステーション」の番組コンセプトである「分かりやすさ」とは、ショーとして編成されたジャーナリズムの特性の一つであり、ある意味でテレビ・ジャーナリズムの傾向を端的に示している。しかしながら、映像を主体として、その映像の文法について詳細に検証しながら、テレビ・ジャーナリズム論を展開した研究は、一部の論評的な議論を除けば、いまだに少ないのが現状であろう。テレビニュース形式の多様化やその一般化のなかで、ジャーナリズムの基本理念の一つである客観性に関しても、その「分かりやすさ」というメディア特性に加えて、問い直されねばならない。

本稿で分析対象とする番組のテーマであるダム建設や自然災害をめぐる議論は、重層的な関係性が交錯する公共的な言説空間を形成するものであり、テレビ報道もその一部を成すものである²⁾。複雑化する世論と利害がからみ合うこうしたテーマを、テレビ・ジャーナリズムはどのように伝え、また、そこにはどのような制作者の立場が示されているのか、本稿の方法上、事例研究となるのは否めないが、考察していきたい。

2. 研究の方法

平成16年1月8日（木曜日）に放映されたテレビ朝日系列「ニュースステーション」を、VHSビデオレコーダーで録画したサンプルを対象に、次のような方法で分析を行った。

まず、放映日の当該番組中の「二風谷ダム」報道の位置付けを簡略に示した。次に「二風谷ダム」報道に関して、一つの独立した映像内容（映像のカット割、例：被害住民へのインタビュー映像／平取ダム建設予定地の映像等）を分析単位として、資料2のような調査項目を設けた。調査項目にしたがって、1) 資料1のような番組編成表を作成して、「二風谷ダム」報道の概要を示し、2) 番組構成や映像の編集、編成の観点から、「二風谷ダム」報道の特性について定性的な分析を行い、3) 扱われた映像の数や放映時間など定量的な方法で簡略な内容分析（日吉、2004）を行った³⁾。

3. 分析結果

3-1. 当該番組中の「二風谷ダム」報道の位置付け

まず、放映日の当該番組中の「二風谷ダム」報道の位置付けを簡略に示しておきたい。「調査報道」である「二風谷ダム」報道は、「イラクへの自衛隊派遣」に関する「時事報道」、「イラクでの日本人外交官殺害事件」に関する「社会報道」、道路公団民営化推進委員の猪瀬直樹氏とキャスターのやりとりを中心とした「トーク・ショー」の3つの特集の後に放映されている。

「プレイメント（何番目の放映か）」をニュース・バリューの指標とするならば、「二風谷ダム」報道は、放映当時の世論を反映して、当該番組中のニュース・バリューが相対的に低いと考えられる。一方、ニュースの形式はそれぞれの「プレイメント」で異なっており、一般のヘッドライン・ニュースのように、時事ニュースが複数放映されるわけではない。これは「ニュースステーション」という番組が持つ編成上の特性であるが、「二風谷ダム」報道は、番組内で「調査報道」としての独立したニュース・バリューを持つということである。必ずしも第四のニュースという「プレイメント」であっても、ニュース・バリューが低いとは言えず、「二風谷ダム」報道を単独で分析することは、ある程度の妥当性を持つと考えられる。

3-2. 「二風谷ダム」報道の構成

「二風谷ダム」報道は、番組開始後30分48秒に、予告編が放映（22秒間）され、その後、CMをはさんで、番組開始後32分40秒から本編（7分53秒間）が放映されている。

資料1は、調査項目（資料2）別に番組構成を整理したものである（本編の編集である予告編は、構成表から除外）。独立した映像内容ごとにV1/V2などの時系列的に通し番号を付けた。本論中のV1/V2など記号は、資料1の通し番号に対応している。

また、番組で取り上げられた論点やトピックなどを整理して、資料1と対応させながら番組の概要を示したのが表1である。「二風谷ダム」報道の要旨として、参考にしていきたい。

表1 「二風谷ダム」報道の構成と要旨

報道内容の要旨	映像番号	露出時間
スタジオからの問題提起	v 1	10秒
「二風谷ダム」の概要	v 2	20秒
ダム建設批判に関する世論の紹介	v 3-v 6	16秒
「平取ダム」建設への問題提起	v 7-v 10	32秒
平成15年8月の台風と洪水による被害について	v 11-v 12	21秒
「住民側」と「開発側」の対立構図の提示	v 13	19秒
浸水被害の状況と原因の検証	v 14-v 21	1分24秒
「北海道開発局」の対策と責任	v 22-v 34	1分39秒
「住民」の被害状況と主張	v 35-v 41	58秒
「北海道開発局」の災害原因の指摘	v 42-v 45	25秒
「災害説明会」の模様	v 46-v 54	41秒
「平取ダム」の役割と住民の意見	v 55-v 58	34秒

3-2-1. 情緒的で仮説的な状況のもとでの議題設定

まず、はじめに「二風谷ダム」報道の導入部にあたるスタジオからのキャスターのコメントを分析する。キャスターの久米宏氏は、「二風谷ダム」報道の第一声として「ダムを作ったら、洪水に

なった・・そんなこと、本当にあるんでしょうか」とのコメントを述べ、報道の論点を簡潔に提示している。

このコメントは、視聴者に疑問を投げかける形式をとっている。一方、番組冒頭で語られるコメントは、新聞における見出しやニュースにおけるテロップと同様、論点の要旨であり、その後に放映される報道が、この疑問をトピックとして扱うことは明白である。よって、このコメントは、「二風谷ダム」報道が、洪水の原因がダムに起因しているかどうかの検証であることを、視聴者に示しているものであると考えられる。つまり、その後のニュース内容の意味を視聴者に示す議題設定の役割を果たしているのである。

コメントでは、「ダムを作ったら、洪水になった」という仮説的な状況を提示し、「そんなこと」という言葉で置き換え、「起こり得らない出来事」であるか、仮説的状況の「状態や程度」であるように表現されている。日常用語である「そんなこと」への換言は、情緒的で仮説的な状況にもとづいて、事象を報じるメッセージとしての「二風谷ダム」報道の位置付けを示しているといえよう。

3-2-2. センセーショナルな対立構図の提示

次に、CMをはさんで「二風谷ダム」報道本編が開始される前の予告編を分析する。予告編で編集された映像は、本編で放映されることになる以下の3点、1) 国交省主催の説明会の模様、2) 洪水発生時に避難勧告が流された町の模様、3) 「夜の河川」の映像に挿入される被害住民へのインタビュー音声、の3点から構成されている。本編ではテロップや字幕等で、映像の意味が示されることになるが、予告編では示されていない。予告編放映前の事前の情報は、冒頭の久米宏氏のコメントのみなので、予告編の映像は、調査や取材のコンテキストからメッセージが切り離され、キャスターのコメントと接合することになる。つまり、「ダムを作ったら、洪水になった」という仮説的な状況のコンテキストのなかで、上記3点の映像の意味が生産されるのである。

予告編の説明会の模様の映像には、「人間よりもダムが大事だということですか」「そんなバカな答弁」「常識で考えろ、おまえ」という音声を重ねる。会議の映像と重なる音声からは、災害の発生やその後の対策等で理不尽な対応を受けている人々の存在などが示唆される。「人間よりもダム」という言葉から、なんらかの対立構図が存在することが示され、それは同時に、非常識な答弁を行うものとの対立であることが暗示されている。本編ではこの対立構図が、国土交通省北海道開発局（以下、報道で用いられた用語「開発側」とする）と被災住民側（以下、「住民側」とする）との対立であることが明示的に示されているが、予告編では印象的に示されているにすぎない。また、本編で取り上げられている「開発側」に関しては、人物も言葉も予告編の編集上で用いられておらず、不明瞭な対立構図が示されるのみである。

さらに、映像は、流れるサイレンの音とともにハンディカメラで撮影した不明瞭な夜の町を映し出し、夜の川を撮影した資料映像を挿入しながら、編集された音声として、「言っていることと悪いことがあるんじゃないですか」という言葉を重ねている。編集された映像と音声は、明確な意味を形成しない取材時のコンテキストから逸脱したメッセージであり、センセーショナルに出来事の

切迫した模様や理不尽さを暗示している。

予告編は、二風谷ダムで何が起きたのか、その出来事を伝えるよりも、むしろ冒頭のキャスターのコメントである「そんなこと」というコンテクストに組み込まれ、情緒的で仮説的な状況を設定し、その状況でのセンセーショナルな対立構図を示しているのである。

3-2-3. 映像編集によるテキストの編成

予告編の最後にタイトル映像が放映されるが、その映像内容は「濁流のダムの出水」の模様を写した資料映像である。この映像に重なって「ダムが洪水を呼ぶ？北海道二風谷ダム」というタイトル・テロップが映し出される。カメラがズームして映し出すダムの出水の模様は、「洪水」の映像ではない。また、平成15年8月に起きた台風による出水の模様ではなく、資料映像として用いられている日常的なダム出水の映像である。タイトル・テロップと映像を通じて、「ダムが洪水を呼ぶ」という意味が生産され、テキストが編成されている。こうした映像編集によるテキストの編成は、後述する本編でも数多く用いられており、本報道の一つの中心的な特性である。

3-2-4. ニューストピックの一般化

次に、CM後の本編の分析を行う。資料1を参照しながら、時系列的に番組構成を解説し、その特性について分析を行っていききたい。

V1からV6までの番組構成は、ニューストピックの一般化を行っている部分である。本編冒頭では、スタジオからキャスターが再度、登場し、コメントを述べている。なお、キャスターは、これ以降では登場せず、番組のほとんどはドキュメンタリー形式の映像になっている。

V1で、キャスターは、二風谷ダムの話題に直接言及せず、ダムと治水、地域住民の話題を一般化してコメントを加えている。V2では、二風谷ダムの風景を映し出す資料映像とともに、建設費／住民の反対運動／アイヌ文化との関連などに触れながら、ダムの概要を解説している。この解説では、北海道日高地方に位置すること以外、地理やロケーション、およびダムの役割や機能などには触れず、基本的には、ダム自体の解説よりも、ダムをめぐる社会問題を一般化していることが分かる。V3-V6は、ダム建設批判に関する世論の紹介を行っている。田中康夫長野県知事が「コンクリートのダムを作るべきではない」と述べている記者会見の模様（V3）や、戸倉ダムの建設中止（V4）、川辺川ダム住民訴訟勝訴の模様（V5-V6）などを続けている。

本報道は「二風谷ダム」を焦点とした報道であるが、本編冒頭で示されたニューストピックの一般化から、ダム建設にまつわる世論がトピックの一つの焦点となっていることが理解できる。「二風谷ダム」に関しては、具体的なダム建設批判の世論が紹介されるわけではなく、また、建設肯定派の世論も紹介されていないなど、本編冒頭で一般化されたニューストピックは、ダム反対運動の一般化、という傾向がみられている。

3-2-5. 資料映像と現実映像の編集による意味生産

V8からV10にかけてのナレーションを、映像とともに示したのが図1から図3である。ナレーションとともに示される映像は、「ダムへの激しい出水（V8）→水位の上昇した河川のそばの宅地（V9）→「宅地崩壊の様相（V10）」となっている。この際に「平取ダムの建設への不信を募らせる問題」とのナレーションが重なっており、ダムの出水が原因となって浸水被害を引き起こし「不信を募らせる問題」が起きたというコンテキストが形成されていることが分かる。

V8の映像は、平成15年8月の出水の様相ではなく、その後に番組のために撮影した資料映像と考えられるが、それが「宅地崩壊の様相（V10）」と連続していることから、ダムの出水と浸水被害の関係は、人為的に結び付けられていることが分かる。既に述べたように、ダムの出水と浸水被害の関係は、本報道を通じて検証するテーマである。しかし、編集された映像では、報道を通じて被災の原因や背景を検証する以前に、ダムが洪水を引き起こすというコンテキストを形成しているのである。

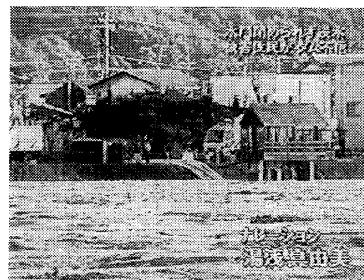
V11からV12は、現実に行った平成15年8月の洪水の様相を描いた映像であるが、映像構成V8からV10と連続していることから、ここでもダムの出水と浸水被害が結び付けられた映像構成になっていることが分かる。ダム出水と浸水被害の関係は、映像編集を通してテキストとして編成され、ダムに「不信」という意味が付与され生産されているのである。

3-2-6. 二者対立構図の焦点化

V13では、一画面中に取材した住民や開発局の担当官などを分割してグラフィック映像によって示している。それぞれ「住民側」「開発側」というキャプションが付けられ、意見の対比を並べて対立構図を焦点化している。後述するが、後の番組構成は、この対立構図にのっとった形で進行している。

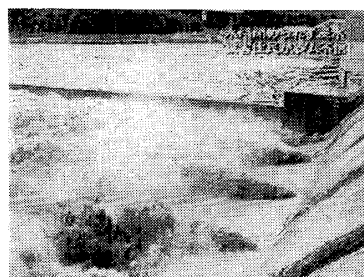
CGなどの映像効果を用いて、分かりやすくニュースを解説することは、テレビニュースの一つの特徴であり、「ニュースステーション」の番組コンセプトの一つでもあるが、それがゆえに複雑化する世論を単純化して示し、二者対立という分かりやすい構図が番組全体を構成することになっているのも、本報道の特性の一つといえるだろう。

図-1 V8の映像



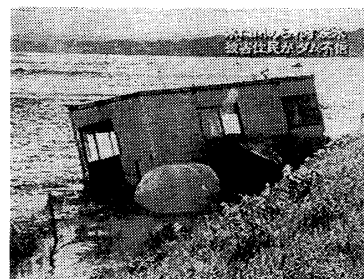
ナレーション；
そんな中、平取ダムの建設への

図-2 V9の映像



ナレーション；
不信を募らせる問題が二風谷ダム

図-3 V10の映像



ナレーション；
で起こりました

3-2-7. 少数の証言者による被害原因の推測と状況の再構成

「浸水被害の状況と原因の検証」を示すV14からV21と、「北海道開発局の対策と責任」を解説するV22からV34は、ダム出水と浸水被害の関係を検証するという意味で、ドキュメントのタイトルに合致した本報道の焦点となる部分である。この部分の特徴は、少数者の証言による推測と被害状況の再構成によって検証を行っている点である。

V14からV21は、住民の証言（V14/V18）、記者の被災地の取材（V16/V19/V20/V21）、CGによる河川設備の解説（V17）の三種類の映像から構成されている。

インタビュー取材により証言が取り上げられた住民は2名で、アルバム写真が浸水で破損した状況を語る「女性住民1（V14）」と、樋門管理が浸水被害の原因であると推測している「男性住民1（V18）」である。「女性住民1」は、番組中で繰り返し取り上げられている「人間よりダムのほうが大事なんですか?!」との発言を行った人物で、「男性住民1」は、なぜ浸水被害が起きたのか、その原因についての推測を行う役割の人物として、繰り返し登場している。少数の証言者による番組構成は、この部分だけでなく、本ドキュメント全体の特徴になっている。

V16で、記者は、被災地の当時の状況を解説するため、「二風谷ダムの15キロほど下流」の現地へ赴き、取材を行っている。この際、「ここに水門があるにも関わらず、この水門を閉めなかったために川の水がこちら側から逆流しまして、この一帯が水浸しになってしまいました」と述べ、河川管理が浸水被害の原因であったことを断定している。この取材映像をナレーションによって解説したものがV20/V21であり、増水にも関わらず樋門が閉められなかったことを解説している。「男性住民1（V18）」の推測は、番組で再構成された被害状況の前後に配置されている。つまり、樋門管理が被害原因というコンテキストのなかで、住民の証言のテキストが配置されているのであり、証言が番組で構成された事実を補強するように用いられているのである。

V22からV34は、北海道開発局次長の証言（V22/V31）およびCGによる開発局の説明論理（V23）、当時の出水データの解説（V33）、民間の「管理人」の証言（V24-V26）、視聴者提供による当時の浸水の模様（V27/V34）、資料映像によるダム出水のイメージ等（V28-30）で構成されている。

インタビュー取材を通じて、北海道開発局次長は、現場に確認を取って対策を行った、という主張を行い、番組は、CGによってその論理の解説を行っている。一方、V24-V26では、現場の「管理人」が匿名で「確認なんてありませんでした」と語ったと報じている。

ナレーションのみで取り上げられた「管理人」の発言に重なる映像は、路上に激しく降る雨（V24）、雨の深夜の電柱と光る街路灯（V25）、激しく流れの交差する河川の氾濫（V26）となっており、それぞれ資料映像を再構成したものである。そのイメージは、次第に雨が激しくなり、河川が氾濫していく模様である。「激しく流れの交差する河川の氾濫（V26）」の映像に重なるナレーションをみると、「開発局：水門はどうするんですか?」「管理人：そのままいいから逃げろ、すぐに逃げろ」となっており、明らかに通常ではない河川の流れを映像で示し、「そのままいいから」というように、対策を放棄したことを示そうとしている。CGで解説した北海道開発局の説明論理

とは、全く異なる対応が行われていたというコンテキストが、映像の編集と状況の再構成を通じて、形成されているのである。

V27には、一般視聴者による撮影が行われた旨のキャプションがついており、視聴者の提供による映像であることが分かる。その映像内容は、浸水被害にあった住宅の映像である。V26までの映像をふまえると、管理人が「逃げ」た後に、浸水被害が起きた、という映像配置になっている。さらに、資料映像を用いて、ダムの上空映像（V28）、濁流のダム出水の様相（V28-29）を写し、「緊急洪水調整」が行われたことを説明している。

V14からV21を「住民側」の証言、V22からV34を「開発側」の証言ととらえるならば、対立する両者の主張を併置した構成になっている。しかし、「開発側」の証言には、その内に「北海道開発局」と「民間の管理人」という相対立する関係が含まれており、センセーショナルに編集された映像を用いながら、「民間の管理人」の証言に乗っ取った映像編集で番組を編成している。つまり、開発側に責任があったという状況的なコンテキストのなかに、「開発側」の証言のテキストが組み込まれているのである。

このように、映像編集の観点から、ドキュメント制作の姿勢を分析していくと、証言や事実の積み重ねから、被害原因を推測するという論理構成ではなく、再構成された被害状況に合致した証言を組み合わせて論理構成をするという姿勢で番組が制作されていることが分かる。

住民の被害に関する主張が伝えられているV35からV41においても、ダム、堤防、水門が、構造的に水害を引き起こし、住民の犠牲を生む、という推測が伝えられている。しかし、こうした構造的背景の分析が、一人の人物の推測的な証言に基づいており、「憤り」といった感情の発露によって出来事の結果を強調することから行われている。

調査や取材に基づき、対立する二者の主張を取り上げることで、一見すると客観的な報道姿勢を見せているが、映像やナレーションなど、テキストの配置を検討していくと、情緒的なジャーナリズムの姿勢が見られていることが分かる。

3-2-8. 番組制作意図にもとづく証言や資料の編集

再度、北海道開発局次長のインタビューが流れている。取り上げられたコメントは、河川管理上の落ち度はないと考える、という結論だけであり、具体的にどのような管理が行われたのかについてや、「緊急洪水調整」がどのような意味を持つかについては、取り上げられていない。

V32は、カセットテープの映像と音声による、過去に北海道開発局が示した「水門を閉める基準」の説明となっている。続くCGの映像では、データによってダムの放流量を示し（V33）、「水門を閉める基準」基準以上の出水があったことを説明している。ナレーションは「今回の台風で二風谷ダムが放流した水の量はピーク時で毎秒5500トン、水門を閉める基準と言っていた1900トンの3倍近くです。逆流するのは判っていたはずですよ」と述べている。「3倍近くです。逆流するのは判っていたはずですよ」というナレーション部分の映像は、V27で用いられた視聴者提供の浸水被害にあった住宅の映像V34が再度、用いられている。V28からV34までの映像をふまえると、「緊急洪水調整」

が、浸水被害を引き起こした、という映像配置になっている。

北海道開発局は、「平成15年8月から10日の台風10号による出水について」という広報資料を作成している（北海道開発局、2002）。V33で用いられたデータは、この広報資料のなかの「二風谷ダム（沙流川）の効果」というグラフを編集したものである。広報資料（図4）を見ると、ダム流入量を示すグラフと、ダム放流量を示すグラフの間に、「常に流入量より少なく放流」と記されているなど、本グラフは、ダムの流入／放流量調整によるダム効果の解説を目的としている。一方、報道では、ダムの緊急洪水調整後の放流量の急激な増加傾向を示すように用いられており、さらに下流の水門を占める基準となっている1900トンを大幅に上回った放流であることを示すように用いられているなど、主に「放流」の観点からのみ解説されている（図5）。図4で示しているように、「常に流入量より少なく放流」と記されたメモは、報道には用いられていない。さらに、広報資料が「流入量」のグラフを赤で、「放流量」のグラフを青で示しているのに対し、報道はそれを書き換えて「流入量」のグラフを青に、「放流量」のグラフを赤にして報じていることからよく理解できる。広報資料ではグラフの頂点を、それぞれ「最大流入量約6400 $\text{m}^3/\text{秒}$ 」「最大放流量5500 $\text{m}^3/\text{秒}$ 」と記しているが、報道では「最大放流量5500 $\text{m}^3/\text{秒}$ 」としか記されていない。

このように報道では、その論点やコンテキストに合わせて、断片的な資料を利用し、本来の意図とは異なる目的で資料を用いている場合がある。

3-2-9. 取材映像の編集とインタビューによる議題設定

V42からV45では、北海道開発局の災害原因の指摘が、主に北海道開発局次長のインタビュー（V43/V45）から構成され、資料映像（V43）や取材映像（V44）などが挿入されている。V35からV41で、住民側からの浸水被害の構造的原因の推測を提示した後である。

まず、二風谷ダムの一部を広報写真風に用いた資料映像（V43）が流され、その上に「ところが開発局の見方は違います」というナレーションを重ねて、「開発側」と「住民側」のダム設営に関する考え方の相違を焦点化している。一方、北海道開発局次長のインタビューで取り上げられたのは、「最近、雨が非常に多い」という自然災害に関するコメントである（V43）。映像構成の流れからは、直近の「男性住民1」の発言である「100年にいっぺんも起きるか起きないかのためにダムを造って・・・（V40）」の回答となるよう編集されており、災害の構造的な原因の指摘に対して、短絡的な回答を提示したように編集されている。さらに、記者は「運が悪かったという風に？」と

図-4 開発局の作成した広報資料

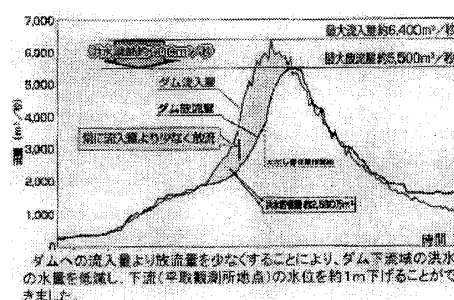
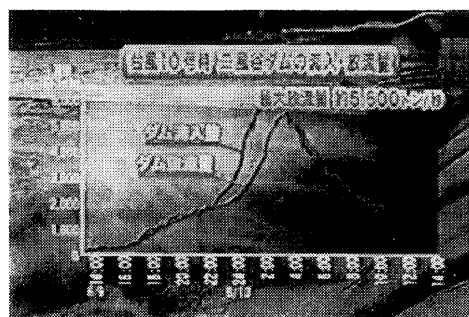


図-5 報道向けに編集された資料



質問し、「一言で言うとそういうこと」と回答した北海道開発局次長のインタビューで取り上げている。北海道開発局次長が、運が悪かった、と回答したのではなく、記者の意見の確認という形式で、「開発局の見方」を説明しようと試みている。構造的な原因を推測する「住民側」と対比的に、開発局の主張は、自然災害説にとどまっており、「自然災害で運が悪い」というコンテキストが、取材映像の編集とインタビュアーの質問の仕方から、意図的に形成されていることが分かる。

V46からV54は、災害説明会の模様であり、説明会の模様を撮影した取材映像を編集し、参加した住民からの質問と北海道開発局の回答、および議論などを、一問一答形式に編集して伝えるものである。詳細に関しては資料1を参照していただきたいが、この部分の特徴は、短時間の編集映像から、かみあわない議論の模様を示したり、報道全般で全く扱われていない補償に関する問題を取り上げたり、質議の模様でありながら質問やそれ以前の議論示さずに「おかしい」といったような回答だけを取り上げるなど、原因究明のために用いられた映像というよりも、むしろ「住民側」対「開発側」という対立構図を情緒的に示すために用いられているという点である。説明会の会場の様子（V54）が映し出され、「住民の戦いはまだまだ続きそうだ」というナレーションが重なる部分が象徴的である。つまり、映像の編集を通じて、対立構図の提示が行われているということである。なお、番組は、「男性住民1」による推測（V58）を提示して、やや唐突に終了し、CMに入っている。その後に、キャスターがコメントを述べることはなく、スポーツ・ニュースが続いた。

3-3. 「二風谷ダム」報道の定量的分析

次に、資料1で整理した表にもとづき、映像内容ごとの放映時間や扱われた映像数などについて、主に定量的な観点から検証したい。

資料にあるように、画面やカット割にもとづいて映像を分割すると、7分53秒の映像は58コマの編集された映像から構成されていることが分かる。一コマあたりの平均放映時間は8.16秒である。

表2は、各コマ別にみた映像内容とその平均放映時間を整理したものである。

各コマ別の映像内容をみると、「住民側」に焦点を当てたものが26コマ/186秒（44.8%/39.8%）、「開発側」に焦点を当てたものが20コマ/164秒（34.5%/34.7%）、平成15年8月の台風および二風谷ダムの対応や被害などを解説した「事象の解説」を行っていたものが11コマ/104秒（19.0%/22.0%）などとなっている。

ここから、「二風谷ダム」報道は、「事象の解説」よりも、主に「住民側」と「開発側」の対立構図を描いた世論のドキュメンタリーとなっていることが分かる。また、一コマあたりの平均放映時間の差を検討した結果、「住民側」が平均7.2秒、「開発側」が平均8.2秒などとなっているが、統計的な差は

表2 各コマ別の映像内容と平均露出時間

	N	総露出時間	平均露出時間
住民側	26 (44.8%)	186 (39.3%)	7.2
開発側	20 (34.5%)	164 (34.7%)	8.2
両者並立	1 (1.7%)	19 (4.0%)	19.0
事象の解説	11 (19.0%)	104 (22.0%)	9.5
全体	58 (100.0%)	473 (100.0%)	8.2 (秒)

※ F=1.67 df=57 P>0.05

認められなかった。放映量の観点からは、「住民側」も「開発側」も、同様のバランスで放映され、両者の主張を併置した報道であったことが分かる。

表3は、映像種類別にみたコマ数、総放映時間、一コマあたり平均放映時間を整理したものである。

表3 各コマ別の映像種類と平均露出時間

	N	総露出時間	平均露出時間
取材映像	32 (55.2%)	269 (56.9%)	8.4
資料映像	17 (29.3%)	105 (22.2%)	6.2
CG	5 (8.6%)	74 (15.6%)	14.8
提供映像	3 (5.2%)	15 (3.2%)	5.0
スタジオ	1 (1.7%)	10 (2.1%)	10.0
全体	58 (100.0%)	473 (100.0%)	8.2 (秒)

※ F=2.69 df=57 P<0.05

主に取材にもとづいた「取材映像」が多く用いられ、32コマ/269秒

(55.2%/56.9%)と全体の5割強を占めている。また、映像の再構成を目的とし、平成15年の台風や浸水被害とは直接関連のない「資料映像」も、17コマ/105秒(29.3%/22.2%)を占めている。一方、図やグラフ、設備の構造などをグラフィカルに示す「CG」は、5コマ/74秒(8.6%/15.6%)などとなっており、データによって客観的に事実を示す資料よりも、主に証言やイメージによって映像が編成されていることが分かる。また、一コマあたりの平均放映時間の差を検討した結果、「CG」が平均14.8秒で比較的に一コマあたりの放映時間は長くなるなど、統計的な差が認められて

表4 映像トピック別にみたコマ数と露出時間

	N	総露出時間	平均露出時間
二風谷ダムで浸水被害の原因等に関するトピック	27 (46.6%)	217 (45.9%)	8.0
二風谷ダムの周囲のダムに関するトピック	20 (34.5%)	158 (33.4%)	7.9
二風谷ダムでの浸水被害の事実に関するトピック	7 (12.1%)	82 (17.3%)	11.7
北海道のダムとは無関係のトピック	4 (6.9%)	16 (3.4%)	4.0
全体	58 (100.0%)	473 (100.0%)	8.2 (秒)

※ F=1.63 df=57 P>0.05

いる。これは、データによって事実を示す映像において放映時間が長いということであるが、逆にいえば、数多く用いられている証言や取材にもとづいた映像が、細かく編集されていることも示している。

表4は、映像トピック別にみたコマ数、

表5 映像の焦点とトピック

	二風谷ダムで浸水被害の原因等に関するトピック	二風谷ダムの周囲のダムに関するトピック	二風谷ダムでの浸水被害の事実に関するトピック	北海道のダムとは無関係のトピック	全体
住民側	10 38.5%	11 42.3%	1 3.8%	4 15.4%	26 100.0%
開発側	14 70.0%	5 25.0%	1 5.0%	0 0.0%	20 100.0%
両者の並立	1 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%
事象の解説	2 18.2%	4 36.4%	5 45.5%	0 0.0%	11 100.0%
全体	27 46.6%	20 34.5%	7 12.1%	4 6.9%	58 100.0%

※ 数値は放映コマ数

※ $\chi^2=24.1$ df=9 P<0.01

総放映時間、一コマあたり平均放映時間を整理したものである（資料1「問題との関連」を分析したもの）。主に、浸水被害の状況の推測や原因の構造的問題を伝える「二風谷ダムで浸水被害の原因等に関するトピック」が多く用いられている。また、「浸水被害の事実」よりも、主に平取ダムについてのトピックである「二風谷ダムの周囲のダムに関するトピック」のほうが多く扱われている。「二風谷ダム」報道は、「ダムが洪水を呼ぶ？～北海道二風谷ダム～」というタイトルが示すように、二風谷ダムでの洪水を論旨としながらも、洪水や浸水被害の事実よりも、その原因の推測や構造的要因に焦点をあて、それを平取ダムなど周囲のダム問題と並立させながら報道していることが理解できる。

表5は、「映像の焦点」別に用いられた映像トピックを整理したものである。「映像の焦点」と映像トピックには統計的な関連が認められている。よって、「住民側」と「開発側」などの違いなどによって、用いられた映像トピックが異なっていることがわかる。全体の3割程度を占めている平取ダムを扱う「二風谷ダムの周囲のダムに関するトピック」において、「開発側」から焦点をあてた報道が少ないことが分かる。

3-4. 「二風谷ダム」報道の特性

以上の分析をふまえ、「二風谷ダム」報道の特性についてまとめておきたい。

まず、浸水被害の当時の映像や取材にもとづく現場検証的な映像に、資料映像が編集されて挿入されるなど、異なる目的で撮影された映像が一つの意図を示すコンテキストを形成して、「ダムが洪水を呼ぶ」という意味フレームを形成している点が、もっとも顕著な特性であろう。本来、報道を通じて検証すべき仮説が、映像編集上では、機知の事実として構成されている。

本論では触れていないが、浸水被害に至るまでの状況の解説が、時系列的な状況説明によって明確になされていないのも本報道の特徴で、一方、ダムの出水の資料映像と浸水被害の住宅の取材映像を編集し、両者の映像を続けて放映することで、ダムが洪水の原因であるという印象を伝えるメッセージが反復されている。その結果、冒頭で示したダム出水と浸水被害の関係の検証という目的が、ドキュメンタリーのなかで示されたとは言いがたいものとなっている。

また、インタビュー証言に、複数の映像が編集されていたり、インタビューの質問部分が示されないなど、映像と言語のダイナミズムのなかで、現実の取材のコンテキストとは異なるコンテキスト、つまり「二風谷ダム」報道が意図するコンテキストのなかで、取材内容が意味をなすような映像編集が行われている。広報資料の利用などからも明らかのように、取材を受けた側が本来主張したい意図は伝わっているとは限らず、報道する側の主張にもとづいた選択的で断片的な資料が編集の上で採用されている場合がある。番組の情報ソースが北海道開発局への直接取材にもとづいた第一次資料を用いたもので、「開発側」と「住民側」とを放映量などの点でバランスよく示してはいても、客観的な報道が行われたとはいきれないであろう。

番組では被害の原因を究明して伝達するよりも、「ダムを作ったら、洪水になった」という仮説的な状況のもとで、「住民側」と「開発側」という二者の対立構図の模様を伝えている。つまり、

科学的な検証報道というよりも、世論の相克を描いたドキュメンタリーであるということである。V13以降の番組構成は、明白に二者の対立構図にもとづいて構成されており、キャスターのコメントやタイトルで示した論点と内容が乖離している。

世論の相克を描き出しているとはいえ、その方法は、少数の証言者の主張に基づいて仮説的な状況を再構成するものであり、二者の対立構図に基づいた分かりやすい構図に限定したアプローチになっている。番組で取り上げられる「住民側」とは被災10世帯に限定されており、富川町のその他の住人は取材されておらず、被災10世帯はそのスケープゴートになったという主張が、一方の側から主張されるなど、限定された世論が取り上げられるなかで、「住民側」対「開発側」という二者の対立構図が描きだされているのである。

4. まとめ

ワイドショーにおけるカットの反復を分析した藤竹は、「事件に関するある情景や事件経過の中で重要な意味を持つ出来事の決定的瞬間に関する映像」が反復されていることに着目し、反復によってそれ自体が完結した映像となり、視聴者にとって見慣れたものとなり、再現可能で、期待を伴うような映像としての効果を持つようになるという（藤竹、1996）。「二風谷ダム」報道では、浸水被害の映像がダム出水などの資料映像とともに反復され、本来検証すべき「ダムが洪水を呼ぶか」というテーマとは別に、それ自体で完結した映像になっていたことは、すでに分析してきたとおりである。本稿では、視聴者への効果までは明らかにできていないが、番組が持ち合わせる特性を映像の文法という観点から示すことについては、ある程度、達成できたと考えられる。

映像の反復に加え、編集やつなぎ合わせに着目し、そこから意味が生産されてくると考える研究に「ニュース・フレーム」の研究がある。ニュース・フレーム研究のアプローチでは、ニュースが言葉や映像を組織化するということは、ニュース制作者の「・・・認識、解釈、提示の持続的パターン、選択、強調、排除（烏谷、2001 Gitlin、1980の引用）」を示すことであるという。また、ニュース・フレームは、客観性や中立性といったジャーナリストとしての活動規範や、視聴者を最大化するような商業主義的な試みなど、ニュース生産にたずさわる者の環境からも生まれると考える。烏谷は、こうした構造がゆえに「社会対立をニュース・メディア内に呼び込む（烏谷、2001）」こととなると述べている。「二風谷ダム」報道においても、ニュース・テキストの組織化によって出来事の因果関係が所与の事実とされていることが明らかになったが、ニュース制作者の立場がよく示されている事例といえるだろう。本稿冒頭で示したように、ダムをめぐる世論は、決して一枚岩ではない。こうしたなかで、「住民側」対「開発側」という平易な対立構図を描き出した映像テキストの生産者は、客観・中立といった既存のジャーナリズム理念の実践とニュース・テキストの組織化という日常的な営為のなかで、重層的な公共的關係性の外部環境に自らを位置付けているとはいえないだろうか。

藤竹が述べるように、こうした映像が、視聴者の見慣れたまなざしに訴えかけ、期待を伴うものであれば、視聴者重視のショービジネス化したニュースの課題が浮かび上がってくる。それは、重

層的な関係性が交錯する視聴者とともに、テレビ・ジャーナリズムが、公共的言説空間を形成できるか否か、という課題であろう。

註

- (1) 本稿は、国土交通省九州地方整備局の委託研究の一部であり、同省報告書「河川情報等調査検討業務報告書」を大幅に加筆修正したものである。
- (2) 先行研究に、馬見塚ら（馬見塚 2001）による長良川河口堰に関するテレビ報道の内容分析がある。内容分析を通じて、テレビには情緒に訴えかける特性があることや、テレビニュースには情報提供型のものや問題提起型、追及検証型、問題解説型などの形式があることなどが示されている。
- (3) 番組の音声内容や字幕内容の SCRIPT 化は、筆者を含む二名の担当者が行い、複数のコーダーによる記述がなされている。なお、その他の項目に関しては、筆者が単独でコーディングを行った。分析対象は、7分弱の短いテレビ映像であり、統計調査よりも、定性的な分析が比較的妥当であると考えられるので、両者を併用して行った。

参考文献

- 藤竹 暁（1996）「メディアイベントの展開とニュース概念の変化」『マス・コミュニケーション研究』第48号
- Gitlin, Todd (1980) *The whole world is watching*, University of California Press
- 日吉昭彦（2004）「内容分析研究の展開」『マス・コミュニケーション研究』第64号
- 角間 隆（1977）『テレビは魔物か』潮出版社
- 川崎泰資、柴田鉄二（1996）『ジャーナリズムの原点～体験的新闻・放送論～』岩波書店
- 鳥谷昌之（2001）「フレーム形成過程に関する理論的考察 ～ニュース論の統合化にむけて～」『マス・コミュニケーション研究』第58号
- 国土交通省北海道開発局（2002）「報道資料 平成15年8月8日から10日の台風10号による出水について」
- 馬見塚達雄編 公共事業とコミュニケーション研究会著（2002）『証言・長良川河口堰』産経新聞ニュースサービス
- 岡井崇之（2004）「言説分析の新たな展開 ～テレビのメッセージをめぐる研究動向～」『マス・コミュニケーション研究』第64号
- 碓井広義（1998）『テレビが夢を見る日』集英社
- 国土交通省九州地方整備局（2004）「河川情報等調査検討業務報告書」

映像番号	V37	V38	V39	V40	V41	V42	V43	V44	V45	V46	V47	V48	V49	V50	V51	V52	V53	V54		
映像	CGによる扉の 扉と水の可 視性	河川の取水 による可視 性	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川の取水 による可視 性	二層谷ダム 記念碑	インテビューに 見える	河川の取水 による可視 性	インテビューに 見える	河川の取水 による可視 性	河川断でインテ ビューに 見える	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性	河川の取水 による可視 性		
開始時間	00:05:40	00:05:48	00:05:52	00:05:59	00:06:13	00:06:13	00:06:13	00:06:22	00:06:29	00:06:38	00:06:40	00:06:44	00:06:47	00:06:53	00:06:58	00:07:03	00:07:08	00:07:12	00:07:16	
終了時間	00:05:46	00:05:52	00:05:59	00:06:13	00:06:19	00:06:19	00:06:22	00:06:29	00:06:38	00:06:40	00:06:44	00:06:47	00:06:53	00:06:58	00:07:03	00:07:08	00:07:12	00:07:16	00:07:20	
映像種別	CG	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	
登場人物		男性住長2 男性住長1	男性住長2 男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	男性住長1	
音声内容																				

映像番号	V55	V57	V58
映像	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える
開始時間	00:07:19	00:07:28	00:07:33
終了時間	00:07:28	00:07:33	00:07:41
映像種別	取材映像	取材映像	取材映像
登場人物			
音声内容			

「映像種類」の分類カテゴリとそれの詳細

1. スタジオ
2. 取材映像
3. 資料映像
4. CG
5. 復元映像

「映像の焦点」の分類カテゴリとその詳細

1. 住民側
2. 開発側
3. 両者の対立
4. 事業の賛否

「問題との関連」の分類カテゴリとその詳細

1. 二層谷ダムへの浸水被害の被害に関するトピック
2. 二層谷ダム周辺の別のダムへの言及や「出水および浸水」の被害と直接関連しない資料映像等
3. 北海道のダムとは異なる種類のトピック

映像番号	V59	V60	V61	V62	V63	V64	V65	V66	V67	V68
映像	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える	河川断でインテ ビューに 見える
開始時間	00:07:46	00:07:52	00:07:59	00:08:03	00:08:08	00:08:13	00:08:19	00:08:22	00:08:29	00:08:38
終了時間	00:07:52	00:07:59	00:08:03	00:08:08	00:08:13	00:08:19	00:08:22	00:08:29	00:08:38	00:08:40
映像種別	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像	取材映像
登場人物										
音声内容										

資料 2. コーディング・シート

調査項目の詳細

1. 映像タイトル
2. 開始時間
3. 終了時間
4. 露出時間
5. 映像種類 ※
6. 登場人物
7. 音声主体
8. 音声内容
9. 字幕内容
10. 映像の焦点 ※
11. 問題との関連 ※

※はカテゴリによる分類があるもの。無表記の項目はすべて自由記述